

# 漁村の社会構造と祭祀

——村落構造理解をめぐる覚書——

関 谷 龍 子

## 一 村落構造理解への視角

日本村落内部の社会的結合を構造的に理解しようとする研究は、それを類型化して把握する方向によって進められてきた。有賀喜左衛門の示した家連合の二つの形態としての「同族団」と「村組」がその端緒である。有賀はこの二要素を相互に転換するものとして捉え、日本村落社会の「民族的特質」の解明に努めたのであるが、これを発展させたのが福武直であつた。

福武はこの二つの型は条件次第で相互転換すると考えるよりも、「農業生産力の発展段階に即して、より歴史的発展的

に究明されなければならない」とし「同族結合」と「講組結合」をあげた。「同族結合」は手作地主の段階における地主小作関係を基盤として本分家関係が支配従属関係として現象する村落であり、「講組結合」は地主小作の身分的關係の後退乃至欠如の上に生ずる過小農の対等な關係が基本となる村落であるとして、村落の社会關係を経済的基盤から説明しようとしたが、経済基盤の発展に従つてやはり両者が相互に変動するものと考えたのである。しかもそれは封建体制下では「講組結合」から「同族結合」への転化に有利に作用したと考え、「同族結合」を封建期を通じた日本村落の基本的性格と規定した。<sup>③</sup>

福武や有賀の論はいずれも「同族」を基調として對概念

を考えようとしたものであったが、仮にこの二項の類型のみで現実を挟り取るうとした場合、その現実の方がより大きな偏差を内包してきたといえるかもしれない。この点に注目したのが蒲生正男・江守五夫・住谷一彦らの諸研究である。

蒲生は福武の「同族」と「講組」結合を地域的分布に即した形で捉え、親族組織の五類型を示した上で、それらを発展的に「同族制村落」「年齢階梯制村落」の二類型として示し、更に蒲生らは、伊豆諸島での村落社会構造分析を通じて、「世代階層制村落」という類型を提唱している。<sup>⑥</sup>この「世代階層制」を年齢階梯制村落の低位類型として位置付けようとする見解も提出されているが、いずれにしても有賀・福武の論にはみられなかった新たな形態の存在を示唆するものであった。

江守は、蒲生と同様「同族制村落」「年齢階梯制村落」の二つを示し、福武らの論に対して「講組型なる村落が、社会構造上、同族型のそれに対し、(家々の同格性という点以外に)とくに顕著に積極的なメルクマールが欠如している」ことから、講組型村落のより積極的な構造原理としての「年齢階梯制村落」を認めようと主張している。また住谷は、親族組織を分類基準にして、「同族階層制」に加えて「年齢階層制」「世代階層制」という三類型を示している。<sup>⑨</sup>

このように、有賀・福武による類型化の展開として、より地域に即した方向で、二類型乃至三類型の設定による実証研究・概念化が図られてきたといえる。特に、江守の説にもあるように、福武の謂う「講組結合」の村落を「同族」との対概念のみに留まらず、より積極的に社会構造の特徴を包括させる原理として析出するための調査・研究が進行してきたと規定することができよう。

一方、これらの村落構造類型論とは別に、近畿地方を中心とする地域に多く分布する「宮座」を持つ村落の研究が戦前から行われてきたが、この「宮座」を持つ村落の有する意味を積極的に捉え直そうとした論者の一人として、高橋統一をあげることができる。高橋は、それまでの宮座の研究が起源や変遷、儀礼といった歴史的関心に偏在していたことを指摘し、宮座を機能・構造的に、また社会構造との関連でとらえる必要性を説いている。そして、「講組結合」や「無家格型」の村落構造と何らかの関連を示唆し、祭祀における平等な家関係の存在を指摘している。<sup>⑩</sup>この高橋の論は必ずしも村落構造類型論として宮座を持つ村落の独自性を問題にしたものとはなっていないが、後に「宮座」の構造を年齢階梯制として把握し、更に「宮座」を「祭祀長老制 (ritual gerontocracy)」と規定するに至っている。<sup>⑬</sup>

更にこれを、宮座を持つ村落の社会構造の独自性という点にまで論を進めたのが蒲生正男である。蒲生は、先の「同族制村落」「年齢階梯制村落」の二類型に加えて、「頭(当)屋制村落」という新たな類型を設定している。その社会構造の特徴は、村落社会における権威の源泉が「同族制村落」のように本分家といった身分に置かれていたり、「年齢階梯制村落」のように年齢に置かれていたりせず、神社祭祀を村落存立の第一義的目的としているもので、神社祭祀の当屋、葬儀への奉仕、村の公共作業の当番などが各戸順送りに平等に負担されている点にあるとする。そして近隣関係を基盤とする互助と協同が著しく、長期的にみて各戸の平等を貫いているものと規定している。<sup>19</sup>

しかし、その構造原理の独自性についての理論的整備、「頭(当)屋制」という用語の概念の整理、「頭屋制村落」の存在する地域性等の問題が残されているし、実証レベルでの成果も限定されている。このような問題の背景には、「頭屋制村落」が前二者の村落構造類型とは異なり、その類型化の着眼点が親族などではなく「祭祀」制度に置かれている点を指摘することが可能である。

新たな類型を設定する場合、「祭祀」制度という要素を分析枠とすること自体の問題以前に、それが従来の、例えば

「家」制度や親族組織の差異による分類では対象を解釈しきれないという要請から出発したものであることを認識する必要がある。 「祭祀」はそこから導き出されたものである。この分析枠の設定は炯眼に頼るところが大きい、また一面で、ある主観性によって経験的事実の分析が行われる以上、分析軸の中心部分と周縁の部分とが相対的に生起することは避けざるを得ない。

即ち、例えば蒲生等のこれまでの事例研究をみても、村落構造を規定・理解する基本的な要因としての共同体や経済・社会、階層・権力といった諸要素とは別に、最も適合的原理として「祭祀」制度が設定され、その制度・組織の解明に重点が置かれている。そこで他の諸要因が捨象されてきたのも、事実認識の主観性を考慮すれば止むを得ることであつたかもしれない。が同時に、かかる分析枠によって対象を再検討する場合、従来の村落構造分析と同レベルで比較できるまでに対象を精査した後、新しい要因を分析枠に投入してみる手続きを与えておくことが行論にとって不必要とは考えられない。何となれば、共通の諸要因の比較を念頭に置かなければ分析枠の設定も恣意的なものに終始する恐れがあるからである。

もとより一事例の報告のみから汎用的な概念を設定するこ

とは不可能であるし、また論者がこれまでに代わる新たな分析枠を用意してのことではないが、本稿では類型設定や分析枠の妥当性を検討する前に、「祭祀」制度を視座に含めたより細微な把握の手続きをとる作業を行ってみることを意図したい。そこでは諸要因（無限定ではない）の制度的総体として対象を把握することが端緒の手續きとなる。過程上先に挙げた諸要因とその相互連関の把握・検討が中心となろうが、検討の方法として対象の現状での実態をとらえると共に、特に通時的な検討も必要であると考えている。史的追究は従来、それ自体を目的とするか第二義的に扱われるかであったかもしれない。しかし現状とその変遷過程の両側面が的確に捉えられてこそ、これまでみてきた社会類型的手法も可能になってくるであろう。いづれにせよ、分類のための分類に陥らぬことを厳に心掛けることが肝要である。

このうち小論では現状把握に重点を置き、村落社会の変動過程は別稿で示すこととしたい。なお「当屋制」「当屋制村落」の厳密な規定やそれを用いての分析は留保しておきたいが、とりあえず「当屋制」を「村落レヴェルの祭祀に当って、家を単位とする祭祀担当者層（特に男子）が、一定の方法（家順・抽選等）を用いた輪番制によって執行の中心的役割（特に司祭者）を果たす制度で、役割担当の期間は一年を単位と

する」ものとし、「当屋」については、「当屋制により役割担当にあたる家の代表者、及びその者の所属する家屋施設の双方の意味を表し、当屋であることの表示・神の分霊がその施設内に設置され、担当期間中その担当者が物忌潔斎に服する」という規定を付与しておくことにする。

小論のなかで扱う事例は以上の規定に即して把握するものであり、宗教的・祭祀的制度を扱ってはいるが、村落共同体的な神社祭祀が「当屋」によって行われている局面に限定している。

## 二 「区」と「本役」の構造

ここで事例研究の対象とするのは、三重県尾鷲市の行野浦地区である。同地区は世帯数五六で、地区の生計の大部分を漁業に依存し農業収入のない純漁村であり、対内・対外的に「行野浦区」を形成している。<sup>15</sup>

行野浦区には役職として区長一名・村役（書記・会計各一名）・山林監守人二名・宮総代三名・寺総代三名がいる。任期は区長三年、村役二年、山林監守人一年で選挙により選出、宮総代・寺総代は任期不定である。<sup>16</sup> また、漁業関係の組織として行野浦漁業協同組合があり、理事長（通称組合長）一名・

理事五名・監事二名がいる。任期はいつでも三年となっており、理事計六名を組合員による選挙で選んだのち、理事の互選で理事長が選出される。理事は金融・購買・定置・庶務等の担当を分担する。

区・漁協の役員、特に区長・漁協理事長は地区内でも要職であるが、特定の個人が長期間任に就いたり、両職を歴任するといったことはなされていない。

区の最高意思決定機構は年一回、一月七日に開かれる総会であるが、この総会の出席を含め、区の運営に関する事項に義務と権利を有するのは「本役」とされる家々に限定される。本役は「地下人」ともいわれ、その資格には

1、行野浦地区に一戸を構えて居住する妻帯者の男子で、一家一人に限る。

2、本役を継承しようとする者は、1、の条件が必要である。

3、本役の家から分家した者で1、の資格を具えていれば、総会での承認を経て新たに本役となれる。

といった不文律の条件が定められている。本役は、まず地区内在来の家筋が最優先に措かれており、従って他所からの転入者が本役となるのは困難となっている。1、のように地区内居住が条件であるため、地区外に転出したときは自動的

に資格を失う。しかし再び地区内に居住すれば資格を得ることが出来る。これは本役の継承者も同様である。また、妻帯の男子が条件であり、これに外れる者（未婚男性、男子のいない家族）は資格がない。また、以上の資格に欠けた場合や、本役の義務を果たせない場合などは脱退することとなっている。本役継承者及び新規加入者は、本人から区への申し込みにより、年一回一月七日の区の総会にて審議・了承されて加入となる。脱退の場合も同様である。

本役の義務と権利には、

1、区の総会に出席すること。必ず出席が原則であり、どうしても出席できない場合は委任状を提出する。

2、年一回（不定、春か秋の比較的漁の暇な時期）に行なわれる区有林の手入れ（枝打ち・下草刈り等）への奉仕。出仕できない場合は代理人を必ず立てる。代理人は誰でもよく、金銭による依頼でもよい。

3、月二百円の区費の納入。

4、区有林を伐採した場合、配当を受けることができる。といったものがある。このうち区有林に付される権利について述べておこう。

区有林は現在四五町歩ほどあり、八割がヒノキで、日常の

管理には山林監守人二名が当たっている。山林全体の評価額は数億に上るといわれるが、近年では一九六二年に伐採・売却、翌年に植林をしたのを最後に、伐採は行なわれていない。伐採による収入は、区の運営上において大きな位置を占めており、現在の収支の基礎をこの時の売却金の預金で補填している。一九〇九（明治四二）年の旧尾鷲町との合併に際して、それまでの区有林が町有林として編入された時、山の一部を地下人に一山ずつ分配したということであるが、現実に配当のあったのはごく少なく、区有林に対しては権利よりも義務の方が大きくなっている。

ここで、本役と非本役の構成について検討してみよう。

表1は行野浦の世帯主の職業構成と本役人数について示したものであるが、漁業に従事する世帯主は一例を除き全て、会社員等の給与所得者も一例を除き全てが本役である。そして僧侶の一例及び無職のうちの大部分が非本役となっている。漁業及び給与所得者の二例が非本役であるのは、二例とも二〇代の世帯主で、その父が本役であるため、一家一人の本役の場合に外れるからである。<sup>18</sup> いずれも親子は別世帯で別居住である。また、僧侶一例は行野浦の出身ではなく、戦後他所から転入し永林寺の住職を務めている。

次に、無職で非本役の一三例についてみてみると、男子が

表1 世帯主の職業構成

職 種		世 帯 主 数	うち本役数	うち組合員数
漁 業	定置網(A)	9	9	9
	(B)	3	3	3
	(C)	1	1	1
	(D)	1	1	1
	ハマチ養殖	11	10	11
	そ の 他	4	4	4
水産試験場職員		3	3	0
海上保安部職員		1	1	0
漁 連 職 員		1	1	1
会 社 員		2	1	1
小 売 業		1	1	1
僧 侶		1	0	0
無 職		18	5	8
計		56	40	40

いないために非本役となっている家が五例、隠居で長男が本役となっているものが四例、病氣・高齢のため脱退が二例となっており、以上の一一例は全てもと本役であった家が非本役となった例である。そして、残りの二例は本来本役でない

二家（うち一例は隠居の独身男性）で、この二人は兄弟関係（次男と三男）にあり、長男家からの分家であるが、いずれも自ら本役加入の申し込みを行っていない。<sup>19)</sup>

無職で非本役者のうち隠居者は以上計五名となる。この五名に表1に現われない（世帯主でない）隠居者五名を加えると、地区内の六〇才代以上の二〇人のうち半数の一〇人が隠居者となっている。また、無職の中には本役も五名おり（うち六〇才代以上四名）、必ずしも無職＝非本役とはなっていないが、生産年齢層の第一線を退き職をもたなくなった年齢者が隠居慣行により隠居を行ない、本役層からはずれる、という図式が、ほぼ認められると考えられる。また、未亡人・未婚男子等も本役層から外れており、これらのことから、本役層とは、職を退いた隠居世代・未亡人・未婚男性を除いた実質生産年齢層、とはば規定することができよう。表2の本役の年齢構成や、後述する表5の職業との相関からも、それが窺える。

このように、本役は区有林の財産に対する権利の運営や受益を利害点とする集団であるといえるが、その資格は本来の行野浦の構成戸中心に限定されるものの、必ずしも個々の構成員にとって固定的なものではなく、可変的な点が特徴である。すなわち、男性がいなくなると自動的に脱退することや、

地区外に居住している本役の継承者でも、地区内に戻れば本役が認められる等の点が挙げられる。本役的人数は年々少しずつ減少しており、構成員の変動が頻繁な状況が指摘できる。

また、先の隠居全一〇例には本役は皆無であり、職業も全て無職である。本役には無職の例もみられるので一概に規定できないが、一戸を構える共同体成員たる男子について、本役層＝非生産者年齢層である隠居層という世代交代の図式を考えることができよう。

表2は男子世帯主についての本役・非本役の年齢構成を示したものである。これについても触れておくと、五〇才代が全て本役であるのに対し、六〇才代以上の非本役の値が多くなっている。

ことが判る。

二〇・三〇才代の非本役二人は、父が本役である二例である。また、非本役の七〇・八〇才代にはこの他非世

表2 男子世帯主の本役・非本役別年齢構成

年齢	本役（人）	非本役（人）
80代	1	1
70代	3	4
60代	2	3
50代	25	0
40代	8	0
30代	1	1
20代	0	1
計	40	10

帯主の隠居者が各一名ずついる。本役の六〇才代以上についても、六例のうち五例は本役の継承者（息子）が他出しているために引き続き本役となっている人であり、息子が居住していれば非本役へと移動する層といつてよい。

次に、区の財政・運営について触れておく。表3は最近三年度分の状況を示したものである。近年の区の財政規模はおよそ年間一五〇万円前後であり、収入の基本は本役から徴収する月二百円の区費であるが、これだけでは支出を補うことはできない。従って、前述の区有林の売却金を預金にし、その内から毎年の予算を賄っている。収入項目としては、預金利子の占める割合が半数近くと大きく、区費は各

表3 行野浦区の財政

年度 項目	1984年度 ※ (%)	1985年度 (%)	1986年度 (%)
A (収入)			
区 費	102,400 (17.6)	98,000 (17.6)	97,800 ( 17 )
幣 帛 料 ・ 御 礼 料	2,000 ( 0.3 )	33,300 ( 6.0 )	33,950 ( 6 )
祭典費漁協分担金	83,623 (14.3)	75,592 (13.5)	154,109 ( 26 )
電 柱 敷 地 代	——	2,175 ( 0.4 )	17,765 ( 3 )
そ の 他	78,840 (13.5)	72,100 (12.9)	67,500 ( 11 )
預 金 利 子	317,100 (54.3)	277,172 (49.6)	219,707 ( 37 )
土 地 補 償 金	2073,209	——	——
計	2657,172	558,339 ( 100 )	590,831 ( 100 )
B (支出)			
神 社 関 係 費	348,566 ( 14 )	532,796 ( 39 )	367,534 ( 32 )
寺 院 費	851,226 ( 34 )	352,691 ( 26 )	358,476 ( 31 )
山 林 費	139,470 ( 6 )	22,440 ( 2 )	62,800 ( 6 )
電 気 ・ 水 道 料	29,004 ( 1 )	26,017 ( 2 )	24,846 ( 2 )
冠婚葬祭費・助成金	773,584 ( 31 )	199,500 ( 15 )	135,000 ( 12 )
雑 費	188,046 ( 8 )	69,041 ( 5 )	50,530 ( 4 )
税 金 等	59,840 ( 2 )	60,060 ( 4 )	60,960 ( 5 )
役 員 手 当	90,000 ( 4 )	90,000 ( 7 )	90,000 ( 8 )
計	2479,736 ( 100 )	1352,545 ( 100 )	1150,164 ( 100 )
A — B	177,436	-794,206	-559,333

(行野浦区「明細簿」より作成)

※ 1984年度収入率は「土地補償金」を除いた額で算出。



年度とも約一七%と一定しているものの、比重は少ない。

支出の主要なものは神社・寺院関係費であり、両方で全体の五〇～六〇%台を占めている。神社関係費は神社の維持・管理・修繕および祭の経費等神社に関する全ての事項に関わってくるものであり、寺院費も寺の維持費・修繕費・祭典費等である。支出の最大のものが宗教に関する経費であることは、留意されよう。この他割合が多いのは冠婚葬祭費・助成金で、助成金は地区内にある老人会・子供会への助成・寄付などを含むものである。そして、多額の臨時収入のあった一九八四年度を除いて、収支対照では毎年かなりの赤字となっており、預金でそれを充当しているのである。

このような区の財政も、時代を遡った近世期のある年の実態についてみると、行野浦は早田・須賀利浦と共に村財政の中に占める漁業収益の割合が多く、収入の中で重要な位置を占めていることがわかる。<sup>20</sup>この漁業収入は主として村営の「地下網」<sup>じげあみ</sup>経営によるものであった。そこで次に、漁業・山林等の生産や就業構造等について検討してゆくことにしよう。

### 三 漁業と就業構造

当事例が伝統的に漁業、しかも地下網漁業を主体とする生

業形態を維持してきたことは先述の通りであるが、ここではまずそれら共同体を維持してきた伝統的漁業であった地下網について触れておこう。

地下網は村営の網で、行野浦では一九五一年まで行なわれていたが、それ以降は定置網・養殖等の導入により廃れている。この当時網は地下（村落）の経営・管理の下におかれ、主としてボラ・ムロアジの二種の魚を獲っていた。漁場は、行野浦が元行野といわれる地点から近世以来移住してきたという経緯を持つため、本来の元行野の地先を中心とした海域と定められており、現行野浦集落地先は集落直前の海面を除き、尾鷲市街地の漁業権の及ぶところであった。

このうち、ボラ網は旧暦一月十一日から旧暦四月までが漁期で、この間は毎日漁場付近に交替でアラミ（見張り）をおき、ナブラ（魚群）を発見すると狼煙をあげ、これを行野浦で見張るマエアラミが見つけると村中にふれてまわり、村内の男女は全てが飛び起きて手漕ぎ船一二～一三隻に分乗し、漁場へと向かった。網は追い網で、漁場へ着くとカキフネ二隻が二手に分かれて投石や舟べりをたたくなどして魚群を網へ追い込み、網の先端にいるアミフネ（サツパ船）に合図を送るとそこからの号令で一斉に網をあげた。他の舟（ワキフネ）は網の周囲に守備し、網を持ちながら舳先や櫓にのって

ボラが網から飛び出すのを防いだ。

水揚げした魚は手を付けずに行野浦に一旦持って行き、村役の一つであった「賄い」が検査をし、尾鷲の仲買人に入札させた。アタリ（収益）があった場合、シロはヤクブネ（アミフネ・カキフネ）に渡す以外は村中の男子に分配した。但し一人前とされる一六才以上は全額、それ未満は年齢によって八分・六分等の区分があった。ボラが百本以上獲れた場合、八〇一六才の男子にも一本ずつ与えられた。

なおアラミは村内の男性が五人ずつ籤で組をつくり、毎日ローテーションを組んで交代で当った。大漁の際はアラミに対して別に配当が貰えた。またアミフネ・カキフネも一月十一日に籤を引いて一年交代で役に当った。この日はアミフネの家が当屋を務め雑煮を食べて祝った。<sup>21)</sup>

ボラは、冬期に湾内に多数集まり、一度に大量の漁獲が得られやすいが、逆にそのためには漁村全体の協力を必要とした。それゆえ村落共同体により維持される地下網がこの尾鷲地方で発達してきた。地下網を支えた漁村の条件は、村落が漁業に依存度が高く、村落規模のあまり大きくない血縁社会で、漁業協同化が容易であったことがあげられている。<sup>22)</sup>そして地下網に関わる経費は村財政から捻出されていた。

この当時までの漁法には、地下網の他、カツオ・イナダの

掛け網、サンマ網、カイドリ・センソウバリ等の個人等で行なう漁法が存在したが、現在の漁業の中心は定置網とハマチの養殖である。定置網とそれ以外の個人漁（漁種名目は刺網）に分けた、行野浦漁協扱いの魚種別年間漁獲高を表4に示した。漁獲高の割合は、表のように全総量のうち定置網分が九六%を占めているが、これが金額別になると総額中定置網八二%、個人漁一八%と、個人の水揚げ高の割合も増加してくる。これは、イカ・エビ・藻類など個人漁が比較的単価の高いものを中心に行なわれているためであろう。

このうち定置網は通例一二人で一統をつくることになっており、行野浦には行野浦漁業協同組合が漁業権を有する海域（元行野地先）で漁協に使用料を納めて操業するもの（表1のA）が一統あり、一二人全員が行野浦の人々で構成されている。更に、尾鷲漁協の漁業権内で操業しているものにB・C・D（いずれも表1）の三統があり、このうちBは一二名のうち行野浦から四名が乗組んでいる。<sup>23)</sup> Cは行野浦の一名が一一人の乗組員（全員尾鷲市内の人）を雇用して操業している個人経営の定置網である。またDは尾鷲市内の人の個人経営の定置網であり、行野浦から一名が乗組員として加わっている。定置網はいずれも月給制をとっており、毎月の最低補償賃金が定められていて、これに水揚げ高に応じて加算されるし

表 4 行野浦漁協の年間漁獲高 (1985年4月～1986年3月)

単位: kg

漁種		1985・4	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1986・1	2月	3月	計
(定置網)	ウルメイワシ		358	18	3,697	18,467	7,159	10,054	2,742	2,477	1,475	11,395	13,786	39,753
	マ イ ワ シ	16,784	32,291	42,772										123,722
	シ イ ワ ス	2			2,362	4,216	49,890	3,643	838	253				61,204
	シ イ ウ			5,624	450	266	115							6,455
	カ ツ オ				547	1,516	1,667	919	596	725				5,970
	サ バ	376	5,126	3,017	1,007	1,107	377		584	1		25	762	12,382
	カジキ類					50								50
	マ ア ジ	175	306	124			871		141			1	46	1,664
	マ ロ ア ジ				1,253	1,451								2,704
	マ サ キ リ	413					256						56	469
	イ サ キ 類		1,490	5,778	937	349		1,593					52	10,403
	タ イ 類		30	4	7		71	298	59					3,661
	カワハギ類	2,454	141	629		9	785	426	411	96	49	239	748	38,159
(刺網)	その他の魚類		22,898	8,725	2,562	1,220			220	348		36	167	859
	スルメイカ	88												
	イ カ 類	324	312	172	183	313	122	308	307	424	130	160	555	3,310
	計	20,616	62,952	66,863	13,005	28,964	61,313	17,241	5,898	4,324	1,654	11,856	16,172	310,858
	マ イ ワ シ	9	14								25			48
	マ ア ジ			67										67
	マ ア ジ		1	13	781				29			22		846
	ハ イ ワ チ					58	18	28						104
	タ イ 類	12	1		2		7	23	15	12	5	41	14	132
	カワハギ類		14	25	12			26	49					126
	その他の魚類		155	83	101	32	315	297		511	526	559	637	3,216
	スルメイカ									183				183
	イ カ 類								2,667	15				2,682
	タ コ 類	4	1	314	248	321	27	27						942
	エ ビ 類	666	957	246	21	30	1	7	17	12	16	38	26	2,032
	計	691	1,143	2,542	1,165	831	758	408	2,777	733	572	655	677	12,952

(漁協資料により作成)

くみである。<sup>23)</sup>

ハマチの養殖は行野浦で一名が行っており、うち二名は親子であるので実質は十統である。ハマチは一九六一年頃から始められたもので、現在は全て個人経営となっている。定置網の場合は午前中の操業に限られるが、ハマチの場合は飼育であるので、数日から毎日のエサやりで費用と時間を費やさなくてはならない。その他、定置・養殖以外に全く個人で漁業を行なっている人が行野浦には五名いる。

漁業以外に給与所得者が計七名いるが、うち公務員の二名は水産試験場職員、一名は海上保安部職員（乗船員）であり、会社員二名のうち一名は水産加工会社、というように七名のうち六名までが漁業に関連した業種に従事している。そして残りが小売業・僧侶と無職となっている。なお行野浦では表以外に副業として民宿（釣り舟）を経営しているものが三例ある。

それでは漁協への加入状況はどうであろうか。行野浦漁業協同組合は漁業法及び水産業協同組合法によって戦後設立されたもので、地区内に居住して年間一二〇日以上漁業に従事している者であれば出資金の納入により誰でも組合員となることができる。組合では理事会の他、年一回四月に通常総会を開くが、現在組合員数は総計四六名となっている。組合員

は本役とは違いい世帯で複数名が加入できるため、表1に示した組合員数四〇名に加えて、表5にある組合員のための六名を加えたものがこの員数である。六名の内訳は、A定置の非世帯主乗組員が三名、個人漁一名、無職二名となっている。成員については、表1のうち漁業従業者は全員、給与所得者・無職でも何割かは加入が認められている。なお、組合員の家族で年間九〇日以上漁業に従業者は准組合員<sup>24)</sup>になることができ、組合員の配偶者三〇名ほどが漁協婦人部をつくっている。婦人部は地区の婦

表5 20才以上全男子の構成（地区内居住者のみ）

地区内の 地位・資格	職業	漁業	給与 所得者	自営・ その他	無職	計
世帯主×本役×組合員		28	2	1	3	34
世帯主×本役		—	4	—	2	6
世帯主×組合員		1	—	—	5	6
世帯主		—	1	1	2	4
	組合員	4	—	—	2	6
なし		2	4	—	—	6
計		35	11	2	14	62

注) 職業は表1の分類による。

人会を兼ねており、海浜清掃・ゴキブリ駆除・旅行などの活動の他、地区の位置といえるA定置網のガーバリ（網張り）の際の食事の炊き出しなど、年に六回ある地区の大きな行事に交代で奉仕している。これまで示したような世帯主・本役・組合員という三つの成員資格を規準に、職種別に構成をみたものが表5である。地区内に居住している男子就業者（二〇才未満では該当者なし）に限定したが、無職が各項目に亘っている他は、職種と組合員加入との関連が明確で

表6 20才以上全男子の年齢構成（地区内居住者のみ）

地区内の地位・資格	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	計
世帯主×本役×組合員	—	—	6	23	1	3	1	34
世帯主×本役	—	1	2	2	1	—	—	6
世帯主×組合員	1	—	—	—	2	2	1	6
世帯主	—	1	—	—	1	2	—	4
組合員	3	—	—	1	—	1	1	6
なし	5	—	1	—	—	—	—	6
計	9	2	9	26	5	8	3	62

ある。うち「なし」に集計されているのは、表6のように六名中五名が二〇代で親と同居しており、市内へ通勤（三名）・漁協職員（一名）・定置網の手伝い（一名）という未婚の子供世代である。

行野浦には計四八隻の船があり、カツオ一本釣業を営む人の一二トンを最大に、多くは一〇四トンの小型船である。いずれも所有しているのは漁業従業者のみで一〇二隻が多くなっている。例外的に八隻が一例あり、これは先述のC定置の個人経営のための装備船である。多くはいずれも各々の従事する漁業のための必要限としての所有となっている。

船所有についてみたが、現金収入についてはどうであろうか。一九八三年時点での行野浦地区各戸の年収は、四百万円以下が全体の八五%を占めており、平均三百万円程となっている。これは同年時の全国勤労者世帯・農家世帯の平均年収より低い値であるが、食糧の自給性、漁村の生活時間・形態の特性、生活圏・購買圏の規模等の条件により、消費も比較的落着いた水準に止まり、収支の均衡が保たれていると考えられる。また、年収の最高は六百万円台の給与所得者が一世帯あるのみで、漁業従事者世帯は二百〇三百万円が圧倒的である。地区内の所得水準はきわめて平準化しており、階層差は殆どみられない。

#### 四 山林所有の変化

さて、当地区で漁業に次いで重要であったのが山林の存在である。現在行野浦で山林の占める位置は私有林を除けば区有林が中心であるが、一部は個人所有の私有林もみられる。現在山持ちの家とされるのは地区内でも数軒にとどまっているが、多くの家々は尾鷲町成立の際本役に分けられた山々を所有している。しかしいずれも漁業等の傍ら山林を所有しているといった程度で、山林業を主としている家はない。

ここで近世末から明治初期の山林の状況について触れておこう。一八七二（明治五）年の行野浦の職業構成をみると、総戸数三〇戸のうち、漁業が半数の一五戸で、他に樵が一〇戸、商業一戸、その他四戸となっている。<sup>29</sup> 樵については必ずしも山林業を主計としていたとは考えにくく、その傍ら漁業も営んでいたと思われるが、無視し得ない数値である。近世期を通じて行野浦では漁業と並んで林業も重要な生計の手段であったといえよう。現在のような定置や養殖は別にして漁業は収入の不安定な産業であり、山林からの収入はそれに比して安定したものであったからである。

それを裏付けるのが村財政中に占める山林の位置である。一八四五（弘化二）年の村財政によると、地下山（村有林）

からの収入は村の総収入の五八%を占めている。<sup>30</sup> 一方支出においては現在もそうであるように、これら収入の中から多くの割合が神社・寺や祭祀への費用として使用された。尾鷲市内の尾鷲九ヶ在の氏神尾鷲神社の毎年の党（当）人への経費が、九ヶ在入会山から支払われていたことも、行野浦と同様この地域の特徴を表すものと考えられる。

一方、私有林やそれに伴う階層状況はどうであったか。山林は本来原則として村有であったが、一六三六（寛永一三）年以降尾鷲地方では私有林の所有が公認されるようになる。

一八七一（明治四）年の記録では行野浦の山林所有者数は七人となっている。<sup>31</sup> 同年の戸数は先にあげた行野浦の人口・戸数記録によれば三二戸であり、村内の二二%が山林を所有していたことが判る。他地区の山林所有者数の総戸数に対する割合は、行野浦と同様な漁業主体の村落であった早田が七%、須賀利が一七%、九木が二〇%となっており、早田を除いてほぼ同じ割合である。しかし行野浦は、一七六〇（宝暦一〇）年の尾鷲組各浦村の大山林所有者を示した記録<sup>32</sup>には現われず、近世中期頃には山林の特定者への集中がそれほどなかったものと考えられる。

村内の階層状況については、幕末期の行野浦村庄屋が山持ちであり、地下網を除いて村内で唯一個人で漁網も所有して

いたといわれる。これは一八七〇（明治三）年の時点での尾鷲各浦村の富裕階層者の統計と一致しており、それによると個人で村内総所有高の四一%の持高を占めており、村内の船数一三隻のうち四隻、三一%を所有していた。これは同時期の他の浦村でもほぼ同様であり、近世後期から幕末にかけて山林等の集積により財を形成したものであろうが、この庄屋も明治初期に没落・転出しており、少なくともそれ以降は経済的に優位な階層は行野浦には存在せず現在に至っている。

## 五 「区」「本役」と祭祀

当地区の氏神は八幡神社であり、境内には恵比寿神社・稲荷神社が祀られているが、八幡神社はもと行野浦港入口に浮かぶ宮島に祀られていたもので、一九一〇（明治四三）年に現在地へ移されたものである。神社移転の状況について、一九一一（明治四四）年の『八幡神社當主人別帳』<sup>35</sup>に

明治四拾參年 氏神八幡神社村前宮島に奉仕を本年小字山神ノ上乃地番下敷地新社建築而同時宮奉而氏神山神津島神社合社す

とあるように、移転に伴い山の神・津島神社が合祀されている。八幡神社は一七五九（宝暦九）年には「若宮」、一八三九

（天保一〇）年には「若宮八幡宮」として記載されており、少なくとも近世中期以降行野浦に存在したことが推測される。祭日は八幡神社が一月十一日、稲荷社<sup>37</sup>が二月初午、恵比寿社が十月二十日、八幡・稲荷は区の主催、恵比寿は漁協の主催により経費が出されている。

三つの祭には各々籤により当屋が選ばれるが、この当屋を務めることが出来るのが本役である。当屋は三つの祭各々別で、各祭日の際に抽籤される。その方法は三回とも同様であるので、ここでは氏神の八幡神社の祭祀について一九八六年の様子から記述しておく。

一月十日、前日の夜に夜籠りが行われる。区の役員（区長・書記・会計）と宮総代三名が公民館に集まり、翌日の打ち合せ等を兼ねて酒食をしながら待機する。公民館には御神体である銅製の馬の彫り物と御神酒スズが飾られる。この間、婦人会から「班」単位に七人ほどの婦人が翌日各戸に配る餅づくりを手伝う。一方神社では、本役四〇名を一〇名ずつ四つに分けた班によって同様に夜籠りが行われる。これは一月十日・二月初午・大晦日の十二月三十一日の年三回神社事務所に籠るための区分であり、区分の方法は「本役」の家順となっている。先述してきたように本役には脱退等の変動があるため、この区分も固定的なものではない。そして年三回を一

班ずつ順番に担当する。この夜籠りは戦前まで青年団によって行われていた。<sup>38</sup> 社務所では同様に酒食が行われ、公民館共共、夜十一時過ぎで散会となる。

翌十一日は、午前十時頃から神社にて役員・本役が全員出席の下、祭典が行われる。この時は尾鷲神社の職業神主（禰宜）<sup>39</sup>に來てもらい祭典を行っている。玉串奉奠の順は宮総代表↓区長↓他の宮総代↓一般の本役の順である。三〇分程で祭典終了後、公民館にて神主を含めて直会が行われ、午後一時頃まで酒食がなされる。

次いで酒食が終了し参加者が一旦帰宅した後、宮総代の手によってつくられたサケの切り身にスルメ・コンブを付けたものが用意され、地区内の人々が公民館にやって來ては神社の御札と共に頂いて帰る。これは本役に限定されないが、本役に対しては御札は必ず買って貰うことにし、非本役の人は銘々の希望で受けて貰っている。

この供物は現在サケであるが、以前はシビ・ブリ等の「大物」といわれる魚の切り身であった。この「大物」は毎年暮れになると区費から宮総代が尾鷲魚市場まで買い付け、当屋に与えられて、当屋宅ではそれを魚鉢に入れ塩漬にし、床の間に供えていた。この「大物」にシビ・ブリが選ばれるのは旬の魚であり大きな魚という意味である。「大物」には橙と十

二銭が供えられるが、それはのち赤魚切りをした人の家の恵比寿に供えられる。

大物配布の後には、宮総代等により箸と包丁を使って赤魚（タイ類）を切る赤魚切りが行われる。一人が公民館の御神体の前に俎板を置き直接手を使わず半紙を口にくわえ、鱗・腸を取ってから、魚の尻から頭に向かって三回包丁で切り、裏返して同様の所作をし三枚におろす。傍らではもう一人が海の潮を杓に入れ、魚が切られるたびに笹の葉で魚に潮をかける。切り終えると元の魚の形に戻し、身と骨を三つに切断して小皿に盛り当屋の家の神棚・恵比寿・家人口の屋根の上の三カ所に供えられる。

最後に、午後二時少し前、来年度の当屋の抽籤が行われるとの無線放送が流され、抽籤を受ける人々が公民館に集まってくる。籤を引く人は、前年までに当屋を務めた人は除かれており、未だ当たっていない人の中から一人一人の名を宮総代が呼び上げ、「三方」の上に乘せられた紙製の籤が引かれ、当籤者が決定する。籤を引く人は本役本人だけでなく、その妻が代理で來ている家もある。籤はこのようにして本役全員が当屋を一巡するようにされており、一巡し終わった年に本役全員による総抽籤が行われ、翌年からは同様に前年の当屋を抜かして抽籤がなされる。



当屋は身内に不幸があった場合は抽籤から除かれる。これをヒがかかるといふが、ヒのかかる範圍と期間は次の通りである。

1、親・兄弟に不幸があった場合は一年間籤を引くことが出来ない。

2、親兄弟以外の親類の場合は四十九日の忌まで引くことが出来ない。この親類の範圍は個々のケースによる。

また、当屋を勤めている一年間の間に右のような不幸があった場合は「当流し」といって「当」を外れ、再抽籤が行われる。但し「当」を外れるかどうかは本人次第による。また、既に一〇ヶ月以上当屋を務めている場合はその人がその年の当屋を済ませたものと見做され、残りの期間の「当」は宮総代に預けられる。当屋であることを示すものは「当渡し」によって渡される御神体とスズ、幟であり、これが当屋宅に祀られるが、「当」の移動があるところの御神体も新しい家へ移動するのである。

さて、抽籤によって次年度の当屋が決定されると、その場で新旧の当屋による「当渡し」が行われ、御神体が新当屋に渡され、一對の御神酒スズの片方に御神酒が注がれ、杯が挙げられる。その後御神体は新当屋や村役らの手によって新当屋の家へ遷座され、新当屋の家ではもう片方の御神酒スズで

杯を挙げる。遷座の列の後からは他の出席者たちが旧当屋宅の前に建てられた八幡神社の幟を降ろして幟の丸太ごと担ぎ、村内を練り廻しながら新当屋宅へ向う。これも以前は青年団により行われていた。この幟は「当」に当たるとその家の前に建てられるもので、現在は祭の前日にしか建てられないが、御神体と共に神社の当屋宅であることを示すものである。この幟の立つ家に八幡神社の分霊としての御神体が一年間奉祀されることになる。神社にも祭になると同様の別の幟が建てられる。

当屋宅では、祭が済むと、この御神体に対して毎月十一日（八幡神社の祭日）に、御神酒をあげなければならない。なお当屋宅に引き継がれるものとしては馬の御神体・御神酒スズ一對・幟の他、神社の掛軸を入れた箱がある。稲荷・恵比寿社の場合も同様であるが、両社には御神体はなく御神酒スズと掛軸のみである。<sup>⑩</sup>

最後に、村落構造が祭祀制度と如何に係わっているかという点に関して、「当」移動の事例を示しておく。

一九八五年の場合、H氏が正月に八幡神社当屋に當ったが、九月二日に同氏の弟（尾鷲市内に居住）が死去し、「当」が流れて再抽籤が行われた。そしてF氏が当籤したが、十月九日に同氏の妻が死去し、「当」が三人（a・b・c）の宮総代の

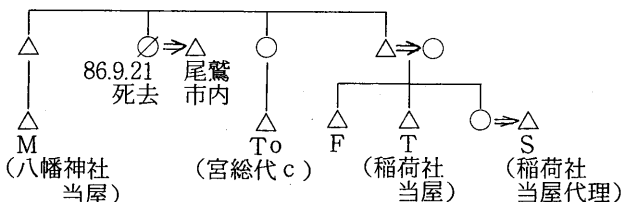
一人(a)に預けられた。既に一月から一〇ヶ月が過ぎており、年に三人も当屋が代わることになるため、この時は再抽籤はせず、翌年一月までこの宮総代が預かることになった。

一九八六年、一月に宮総代に預けられていた「当」が祭の場で新たに抽籤され、K氏が当籤した。ところがK氏の弟(他所に居住)が二月二日に死去し、宮総代aに預けられた。そして四月六日に再抽籤となり、M氏が当籤した。

なお同年二月初午に行われた稲荷社の当屋ではT氏を選出された。九月二日に至って、尾鷲市内に住む行野浦出身の女性が死去したが、これが八幡神社の当屋M氏と稲荷社の当屋T氏両氏にとってオバに当たっていたため、両神社の当屋が同時に流れることとなった。そして二二日に宮総代預りとなったが、三人の宮総代のうちbはK氏の弟に当り、実弟が死去して一年未満、cはオバが死去して四十九日が明けていない、という状況だったため、残ったaが預かることになった。この二つの「当」は、四十九日の忌の明けるのを待って、八幡は十一月七日に、稲荷は少し早めで十一月一日に、各々M氏・T氏に戻されている。

また稲荷社の場合、当屋に当たったT氏は会社員のため、先述の稲荷社への毎日の奉仕を実姉の夫である地区内のS氏に一年間依頼していた。ところがT氏のオバの死去でS氏にも

図1 当屋をめぐる親族関係



注) イニシャル表示は行野浦地区内居住者でヒのかかった人を表す。

また、その具現形態である「当」移動には、内婚の高率と親族関係の錯綜化という当地区の家族構造も端的に反映され、極めて頻繁なものとなっている。

ヒがかかり、稲荷社への奉仕は九月二日・十一月一日の間、稲荷・恵比寿両社の神主役を務めることが多く、この年の恵比寿社の当屋でもあるJ氏に委ねられている。

当屋は本来物忌・潔斎をして一年間神聖な「当」を務めるものであったが、現在では生活や価値の変化により嚴重な物忌等は行われなくなっている。しかし、穢れの忌避という受動的な側面でこれがおも維持されている点に留意すべきであらう。

## 六 結びにかえて

これまで行野浦地区の村落構造を特徴的に摘出し、更に祭祀との関わりについて述べてきたが、最後にこれらの事例について簡単な整理を試みておきたい。

行野浦は夫婦家族型の家族構成を特徴とし、それは潜在的ではあるが隠居慣行の存在と深い関わりを有していた。そのような家族を結ぶ家々の関係は、本分家間の関係よりも、婚姻を媒介とした家相互の連帯が重視されていた。家族構造の内部においては親—子世代間による親族の分節化が意識され、家相互においてはそれら各世代間による婚姻によって同世代間を結ぶという、横軸に広がる世代階層とでもいえるような秩序が形成されていると考えられる。

祭祀レヴェルにおいては、先の「当屋制」に引き付けて整理すれば、実質的司祭者としての「当屋」の存在をあげることででき、それが有資格者内部で全く均等に役割を担っていた。「当屋」は職によってその資格が象徴化され、神の分霊或いは神体としての祭器物を一年間当屋で奉戴し、潔斎はなされないものの、死に対する物忌みによりその機能性を維持している。

とりわけその担い手は、世代的に纏まりを持つ「本役」層

であって、それは村落秩序の経済的・政治的運営者層と一致していた。この「本役」層は、成員の構成が必ずしも固定的ではなく、理念的には、隠居世代と青少年世代を除き、村内に系譜を有する家の男子継承者は、全て本役となり得べき可能性を有している。

このようにみると、蒲生正男の「当屋制村落」モデルに適合的な事例として位置付けることが可能であろうが、本事例の場合、村落構造が祭祀制度に適合的なのではなく、村落構造に対応して、祭祀制度も構成されているという理解をしておきたい。即ち、行野浦は世代階層的秩序を有する漁村であり、生産形態も地下網という、共同体規制を伴うものを在来を中心としてきたし、近世後期以降の山林所有を中心とした経済的上昇化層の存在を指摘できるものの、それが名望家・親方的支配と結びつかず、家格差の少ない社会が展開されてきたといえるからである。

従って、漁村・農村の相違や、以上の諸要因の何れかが異なることによって、その村落の持つ性格の多様な展開があるのであり、それと「祭祀」とが整合性を有するか否かの検討は、「祭祀」を他の要因と並列的に扱うことに関わってくるであろう。また、諸要因の中から特定の要素を抽出して考察する場合でも、地域社会の実態に即した、しかも地域の構造

を総体的に把握し理解するという手続きを踏まえることが一層重要になってくると考えられる。

〔註〕

- (1) 有賀喜左衛門「同族と親族」『有賀喜左衛門著作集』X、未来社、一九七一、四六～五二頁。
  - (2) 福武直『日本農村の社会的性格』東京大学出版会、一九四九、三四頁。
  - (3) 福武、前掲書、三六頁。
  - (4) 福武、前掲書、三八～四一頁。これら福武の論に対する批判的検討としては、河村望・蓮見音彦「近代日本における村落構造の展開過程（上）（下）」『思想』四〇七～四〇八号、一九五八、など。
  - (5) 蒲生正男『増訂・日本人の生活構造序説』ペリカン社、一九七八、三三五頁。
  - (6) 蒲生正男・坪井洋文・村武精一『伊豆諸島』未来社、一九七五、三六八～三七四頁。
  - (7) 江守五夫『日本村落社会の構造』弘文堂、一九七六、二五三頁。
- また、この間の検討については、鳥越皓之『トカラ列島社会の研究』御茶の水書房、一九八二、三五五～三七九頁。
- (8) 江守、前掲書、五二頁。
  - (9) 住谷一彦『共同体の史的構造論』有斐閣、一九六三、三六九～三七〇頁。
- なお、以上のような論とはやや視点を異にするが、磯田進は、

村落の人々の行動にみられる価値に着目し、「家格型」と「無家格型」の類型を提示し、更にはそれらのうち「家格型」村落を細分して「同族型」と「非同族型」という計三類型を示している。

磯田進「村落構造の二つの型」『法社会学』一、一九五一、及び同「村落構造の『型』の問題」『社会科学研究』三一、二、有斐閣、一九五一。

(10) 「宮座」自体の研究史的整理は、徳川真理子「宮座の研究（一）」『佛大社会学』三、一九七八、で詳しく扱われている。

(11) 高橋統一「宮座の構造について」『社会人類学』一、一九五七。

(12) 高橋統一「宮座制覚書」『民族学からみた日本』河出書房新社、一九七〇、八三頁。

(13) 高橋統一「宮座の構造と変化」未来社、一九七八、一一頁。ただしその表現に「祭祀」を付与しているとおり、年齢階梯制の一つとしての祭祀組織が長老制によって秩序づけられているとみるのであって、宮座を持つ村落の社会構造の独自性については明確に示していない。

(14) 蒲生正男「日本のイエとムラ」『世界の民族』一三、平凡社、一九七九、四三頁。

(15) 本稿の事例は一九八四～八八年までの調査に基づいているが、人数・数値等については原則として一九八六年九月時点の現況で記述を行った。

なお行野浦地区の概況や、同地区の家族・親族の構造については、拙稿「親族関係の地域的存在形態——非同族型村落の事例研究——」『佛大社会学』一〇、一九八五、に示してある。

(16) 宮総代・寺総代は地区内を三つに分けた「班」から一人ずつ選出される。「本町」が三班、「井戸町」・「新町」で二班、「川向う」が三班となっている。両総代のうち、比較的若い人が務めるのが宮総代ということになっている。

(17) 一九八三年に行われた同地区対象の「社会生活に関する調査」によると、地区で問題解決のための中心的役割を果たすリーダーは区長と組合長、との回答が殆どであり、その役職に就く人の条件として「実行力のある人」が最も多く挙げられている(西谷弘「漁村社会の変容と再編成―三重県尾鷲市行野浦地区の事例研究―」『佛大社会学』九、一九八四)。

行野浦地区では漁村にみられる名望家・親方層による支配秩序がみられないことが特色だが、この結果からもそれが裏付けられる。家格や階層差によるのではなく、個人のパーソナリティに適格性の重心が置かれている。

(18) このことから、本役の構成員たる「家」が「世帯」や「住居」を基準としていないことがわかる。

(19) 一例は独身であるため本役の資格に欠けている。また一例は個人的理由によるもので、特に外在的要因によるものではない。

(20) 一八四三(天保一四)年の村収支の記録による。『尾鷲市史』上巻、尾鷲市役所、一九六九、二四二頁(以下『市史』と略す)。(21) 地下網を含め、志摩から熊野灘沿岸にみられたボラ漁の歴史・実態などについては『海と人間』三、一九七五、及び一一、一九八四、の両号に特集論文が掲載されている。

(22) 『市史』、六二〇～六二二頁。

(23) 四名中一名は非世帯主・非組合員で二〇代(後述)のため表1には含まれていない。また一名はこの定置網の船長を務めて

いる。

(24) 従って厳密には、定置網従業者は給与所得者に分類されるが、本稿では自営業種としての漁業に一括してある。

(25) 准組合員は理事の選挙権を有しない。

(26) ガーバリ、永林寺・八幡神社・稻荷神社・恵比寿神社の各祭日、寺院境内の魚鱗供養塔の供養、の計六回で、三つの「班」(註16参照)を単位として順番に務める。

(27) 前掲西谷論文。

(28) 一九八三年度の勤労者世帯平均年収(実収入)は四九〇、八万円、農家世帯平均年収(総所得)は六四八万円となっている。経済企画庁編『国民生活白書』昭和六一年版、一九八六、四～五頁より算出。

(29) 『市史』、五七三頁。

(30) 『市史』、五九七頁。

(31) 『市史』、五九八頁。

(32) 『市史』、五九九～六〇一頁。

(33) 『市史』、六〇〇頁。

(34) 『市史』、三三七頁。

(35) 行野浦区有文書。

(36) 『市史』、七九六頁。

(37) もともと祭日は一月十五日であったが、昭和以降尾鷲神社の禰宜を神主として頼むようになると、同日が尾鷲神社管轄の八幡神社(尾鷲市内)の祭日と重なるため、一月十一日に変更された。以後行野浦の祭日は十一日に行われている。

(38) 現在青年団は、青年層人口の減少により解散している。

(39) この禰宜は一月十一日・六月十一日の年二回祭典に参加して

いる。なお明治以降戦前までは、行野浦でも地区で専任の神主を雇い、地区内に住まわせていた。これには、専任の神職を置いている神社は合祀されないという背景があったそうであるが、一時期のことになっている。

当屋は制度的に神主という司祭者が存在するものの、一年間の祭祀執行のうえで重要な司祭的役割を担っている。

(40) なお、この稲荷・恵比寿社の祭祀の方法も八幡社の場合と同様であるが、前夜の夜籠りは稲荷社にだけ行われる。また、両社とも八幡社に行われるような大物の配布・赤魚切りはない。行われるのは祭典と直会、籤の抽籤と当渡しである。当渡しで渡されるものは八幡社のような御神体の彫り物はなく、御神酒スズと幟、掛軸の箱である。

祭典においては尾鷲神社の禰宜は来ず、地区内長老者が神主役を務めている。直会の場所は稲荷社が公民館、恵比寿社は漁協となっている。

各当屋での任務は、恵比寿社は祭日の毎月二十日に当屋宅で御神酒をあげることであるが、稲荷社のみは、毎日欠かさず社まで参拝と清掃に行かなくてはならない。

(大学院博士後期課程)